神静民報　2014年11月9日（日）

「花紀行」に込めた思い

古屋さん 足柄台中生徒へ語る

生徒らの前で「花紀行」の概要や込められた思いを話す古屋さん

南足柄市竹松（池田和男校長、生徒414人）の市立足柄台中学校で6日、四季の花を活用した地域おこし「あしがら花紀行」を題材に、講演会が開かれた。同市の元幹部職員で、事業の立ち上げに深く携わった古屋富雄さんを講師に迎え、地域での取り組みについて学んだ。

講演会には全1年生148人が参加。生徒らは12月、酔芙蓉農道（同市千津島）でのせん定作業に参加する。同農道は、花紀行のイベント「酔芙蓉まつり」の会場。農道を管理する住民団体の高齢化が進み、重労働となっていることを受け、手助けするという。

古屋さんは花紀行の趣旨や内容を分かりやすく紹介。同校学区にイベント会場があり、生徒らにもなじみ深いスイフヨウとハナアオイを説明した。

農道にスイフヨウを植栽した理由については、周辺に広がる水田に使われる水が、酒匂川からひかれているのをヒントにした。朝、晩で花の色が白から赤に変わる特徴に注目し、「酒のにおいがする水で酔っ払った」とのストーリー性を付け、意味合いを持たせた。

花には観光客を呼び込む力があると前置きし、さらに多くの人を呼び込むためには、地域ならではの付加価値が必要。一風変わった冬に咲くヒマワリなど、自らが同市塚原の農園でモデルケースとして進めている事例も交え、解説した。

また、来場者対象の農産物直売所を設ければ、地域活性化にもつながる。花紀行は1998年の誕生以降、年々人気が高まり、開花期には県西地域外からも行楽客が訪れる花のスポットとして定着。

このほか花紀行の取り組みでは、年間を通じて観賞できる花の環境を整え、地域との交流を重視している。

生徒らが参加するせん定作業は、年齢の離れた住民と親睦を図れる貴重な場。これを機に若い世代が活動に加わるなど、酔芙蓉まつりを長く受け継いでほしいと期待を込めた。

生徒らは、地元での花のイベントに込められた願いを熱心に聞き、せん定のボランティア活動を前に、それぞれ意識を高めた。原あさかさんは「取り組みや成果がよく分かりました。今後の活動に生かしていきたいです」と、生徒を代表し感謝。

同校では、地元で進められている花紀行を知り、生徒らのボランティア精神も育もうと、住民と協力した活動を続けている。

咲き終わったスイフヨウの枝を落とす作業の手伝いは、4年前から開始。過去には、酔芙蓉農道近くのハナアオイ農道でのイベントにも協力していた。

花紀行の知識を身につけることで、ボランティアの時間を有意義に過ごせると考えた教員らは、スクールボランティアを通して古屋さんに依頼。事前学習の場として、初めて講演会を開いた。

地域の世代間交流を大切に